

ゲルマン語 *rikja について

丑 田 弘 忍

1. はじめに
2. J. Trier 以前の説
3. J. Trier の説
4. P. v. Polenz の説
5. むすび

1. はじめに

現代ドイツ語の Reich をさかのぼれば、中高ドイツ語 *riche*, 古高ドイツ語 *rihi* としてあらわれる。これをゲルマン的に引き戻せば、名詞構成要素接尾辞 *-ja-* (原印欧語では *-io-*) をともなう原ゲルマン語 **rikja* が推定される。その語幹は **rik-* である。この **rikja* について、音法的に *-k-* の部分は第二次子音推移を経て、古高ドイツ語 *-hh-*, 中高ドイツ語 *-ch-* となり、現代ドイツ語 [ç] として今日に至っている。従って、第二次子音推移を蒙っていない古ザクセン語は *riki*, 古ノルド語は *rike*, 古英語は *rice*, ゴート語は *reiki* としてあらわれる。*-i-* の部分は、中高ドイツ語時代に *ei* と融合して *ai* [ae] となった。語末の *-i-* は *-e* と弱化され、ついには落ちてしまっている。ゲルマン語語幹部分 **rik-* は *-ja-* 以外にもいくつかの接尾辞をともなう派生語を作っている。表にまとめてみると次頁のようになるであろう。

このゲルマン語語幹 **rik-* をめぐって現在まで幾多の説がなされている。まず第一はケルト語からの借用説である。これを支持するのは、A. Meillet⁽¹⁾, W. Streitberg⁽²⁾, H. Krahe⁽³⁾ などの多くの印欧語学者である。この一般的となっている借用説も、**rikja* についていえば、ケルト

rik を語幹とした派生語

語幹+接尾辞	ゲルマン語						古高ドイツ語
	ゴート語	古英語	古ノルド語	古フリジア語	古ザクセン語		
rik-a-z	reiks						
rik-a-m		ric					
rik-ōn		rica					
rik-ja-	reiki	rice	rike	rike	riki		rihhi
rik-isō-		ricsian					rihhison
rik-ino	reikinon						

語の *rīg-s「国王, 支配者」からゲルマン語語幹 *rik- を得たとするものと, ケルト語の rīgiom「王国」からの直接の借用とするものに分かれる。いずれにせよ, この借用説は, ラテン語の regere「あやつる」にあられる原印欧語 *reġ「伸ばす」の延長階梯 *rēġ からケルト語の *rīg- (原印欧語 *ē はケルト語で確実に i となり得る) を引き出し, このケルト語の形よりの借用とするものである。したがって, ゲルマン語の -k- は, 第一次子音推移終結以前にケルト語より -g- がとり入れられ, $g > k$ となったとするものである。

このケルト語からの借用説に対して, *rik- を印欧語からの直接の遺産である, 即ち, 印欧語からの相続語とする説もあらわれている。この説をかかげるのは K. Brugmann⁽⁴⁾, J. Trier⁽⁵⁾, P. Polenz⁽⁶⁾ などである。彼らの考えの底にあるのは, かなり早い時期でのケルト語からの借用, つまり第一次子音推移終結以前の借用を疑っているように思われる。

以下, 逐次これまでの説を, 非ケルト語借用説を中心にして, 紹介, 検討してみよう。J. Trier の説は画期的であるので, それまでの説とそれ以後の説 (v. Polenz) に分けてみよう。

2. J. Trier 以前の説

最初に *rik のケルト語からの借用説を主張したのは, de Jubainville⁽⁷⁾

であろう。もし、*rik- を印欧語からの直接の遺産とすれば、音韻上の難点が生じることになる。原印欧語 *rēg は古代インド語では rāj として、ラテン語では rēx としてあらわれる。もし、ゲルマン語にこの ē が直接伝わったならば、ゴート語では ē となり、西ゲルマン語では ā となるので、それぞれの形は rēk-, rāk- となっていなければならない。しかし原印欧語 *ē はケルト語では i となり、これは rī, rix, rīg-「国王」、rige「王国」や人名 Catu-rix, Rigo-magus にあらわれる。ケルト語借用説においては、この rīg- の部分がゲルマン語に借用されたとされている。それも第一次子音推移を受ける以前とされなければならない。なぜならば、g は以後の借用ならば、ゲルマン語において g のままでなくてはならない。では第一次子音推移はいつ始まり、いつ終わったのであろうか。これまでのところ、紀元前2000年頃に始まり、紀元前500~300年頃に終結したとされている。非ケルト語借用説が生まれるに至った最大の理由は、そのようなかなり早い時期、つまり第一次子音推移終結以前でのケルト語からの借用に対しての疑問である。次に順次非ケルト借用説を中心に紹介、検討していこう。

A. Noreen⁽⁸⁾ は Fick (Wörterbuch⁴ 1, 94) を引き合いに出して、ē>i の移行は、一応の疑いを抱きながらも、印欧語口蓋音 k̂, ĝ, gh の前では可能ではないかと暗示している。即ち、ラテン語 rēx: ゴート語 re-riks, 古代インド語 bhrājate: 古代ドイツ語 pi-plihhit「輝く」、古代インド語 dācati「崇拝されている」: 古代ノルド語 tigenn「高尚な」の対応である。問題の rēx: reiks はさておくとして、後二者については問題がある。意味は共通しているが、それぞれの印欧語根を異にしている。古代インド語 bhrājate は *bherēg- に、古高ドイツ語 pi-plihhit は *bhleig に、古代インド語 dācati は *denk̂ に、tigenn は deik̂ に由来している。原印欧語 *ē は古代インド語では ā として、*ei はゲルマン語では i としてあらわれ出るのだ。Noreen の指摘はやはり受け入れられないであろう。

K. Brugmann は一般的なケルト語借用説を紹介した後⁽⁹⁾ に、印欧語根 *rē(i)g-/rīg- のアプラウトを提唱し、ゲルマン語においては *rīg の

方が一般的になったとして、ケルト語借用説をしりぞけている⁽¹⁰⁾。この説は後に Falk-Torp (Norw.-dän. etym. Wb. 2, 1911, 898) に受け継がれた。しかしながら、これは Walde-Pokorny (Wb. d. idg. Spr. 2, 1927, 365) によって否定された。*ē(i)/ī* のアプラウトは不可能であるとしている。

次に、早い時期（第一次子音推移以前）におけるケルト語からの借用を否定するため、その打開案を提出したのは S. Feist, J. Pokorny, H. Jacobsohn などである。

S. Feist⁽¹¹⁾ はケルト語 **rīg-* からのゲルマン語 **rīk* の借用を否定してはいないが、第一次子音推移以前とは考えていない。即ち、ある時期におけるゲルマン語内での *g > k* の推移を否定するものである。Feist はイリュリア人、ヴェネト人、ケルト人、ゲルマン人の先史関係から話を進めている。⁽¹²⁾ イリュリア語を話したイリュリア人は古代ヨーロッパの広い地域にわたって、北はバルト海から地中海に至るまで住んでいたと思われる。ヴェネト人はかつてはヘロドトスの報告などからイリュリア人の一部とされて来た。イリュリア・ヴェネト語のようにあらわされる。ケルト人による北イタリアの侵略とイリュリア人の駆逐の紀元前4世紀にケルト語はイリュリア・ヴェネト語の上に乗っかった。以後イリュリア・ヴェネト語の勢力はケルト語の影響の下にしだいに衰え、死滅した。イリュリア文化はドイツ東部まで進んだが、イリュリア人は押し寄せ来たケルト人によって消滅した。従って、イリュリア、ヴェネト人は紀元前4世紀頃までゲルマン人の最も近い隣人であって、ゲルマン人は彼らから印欧語の諸現象を享受した。それ以後ケルト人が彼らの後を受けてゲルマン人の隣人となり、その頃終結した第一次子音推移の期間中にケルト語からゲルマン語への借用はあり得ないのではないかと Feist は考えているようである。そしてその抜け道として Feist は次のように考えた⁽¹³⁾。ケルト語の *rig-* などの *g* を問題にした。ここでのケルト語の *g* の音価は有声閉鎖音ではない。Orgetorix は貨幣で Orcitirix ともある。Löbbek 出土の硬貨には Germanus の代わりに Cirmanus と書かれている。ローマ人に *g* で再生

される音は無声軟音であったと推定される。この軟音をゲルマン人はそのまま *k* によって再現した。これと並んでケルト語 *k* は celicnon からのゴート語 *kelikn* において保たれている。ケルト語 *ambactus* からの古高ドイツ語 *ambaht* においては *k* から *h* の推移が示されているわけではない。すでに *h* は軟化されたケルト語であった可能性がある。ケルト語の無声閉鎖音の軟化はゲルマン語における無声閉鎖音から摩擦音への推移との類似性を有している。原ケルト語 *perkunia* からのゴート語 *fairguni* の借用は原印欧語 *p* がケルト語においてすでに両唇音 *f* の中間段階に達した時、つまり *h* になって消滅する前の時期に生じたかもしれない。ケルト語 *μαρκα* は軟化された *k* で受け入れられ古代英語 *mearh*, 古高ドイツ語 *marah* となった。ゲルマン人はこれらを *χ* でもって発音した。Feist が述べるところは、ケルト語は有声閉鎖音を軟音としてすでに有しており、この軟化した音がそっくりそのままゲルマン語に借用された。従って、第一次子音推移期間中の *g > k* の推移はあり得ないと Feist は結論づけている。

この Feist の説に真向から反論したのは J. Pokorny⁽¹⁴⁾ である。Feist が *ambaht* の例で *k* からの *kh* を軟化と理解する時に、Pedersen⁽¹⁵⁾ を引用することによって、Feist の誤った主張の根拠が、そこにあらわれているとする⁽¹⁶⁾。事実、Pedersen⁽¹⁷⁾ は、ゴール語は *k*, *t*, *p* を非軟音及び軟音、即ち *k'* (= *kh*) と *k*, *t'* (= *th*) と *t*, *p'* (= *ph*) と *p* を所有していたかもしれないと、推測している。また、*g*, *d*, *b* もゴール語は非軟音及び軟音を有していた、とする。即ち同一音の軟音及び非軟音の並存を認めている。しかし軟音の生じる条件として Pedersen は別の個所で述べている⁽¹⁸⁾。つまり、ほとんどの非音節音は母音間、語中音、2つの語の第2語の語頭子音において軟音を有する。また別の個所で⁽¹⁹⁾, *r* と *l* の後ではゴール語の閉鎖音は軟化しない、と述べている。このことに関して Pokorny は続けている⁽²⁰⁾。母音間において閉鎖音は、印欧語の有声閉鎖音と帯気音が摩擦音になる程度に、弛緩したところに、軟化現象が生じる。従って、軟化された有声閉鎖音は無声軟音になり得なかった。また *rig-*

における *g* と *Orgeto-rix* やあるいは *Germanus* における *g* とを同一の段階で論じることや, *μαρκα* における *k* の軟化現象を話題にすることは間違っている。*r* と *l* のあとではゴール語における閉鎖音は近代になっても軟化されていない。前の語にかかわりのない語頭音は軟化されない。借用の際に, *g* と *d* が軟化されていたならば, 摩擦音 *g* と *ǵ* は決してゲルマン語の *k* と *t* で再現され得ない, と Pokorny は主張する。Pedersen に依拠する限り, Pokorny の Feist 批判は正しいと言えよう。また Feist は, *Vacalus* (カエサル, ガリア戦記 IV 10, 2) / *Vahalis* (タキトゥス, 年代記 II 6) 「ライン川河口の支流名」, *Volcae* / *Walh-* 「ガリアの民族名」の二重形をもってして, ケルト語に軟音と非軟音が並存していたことを, 証明しようとするものであるが⁽²¹⁾, これは明らかに間違っていると言えよう。*Vahalis*, *Walh-* は *k > χ(h)* の推移を終ったゲルマン語である。従って, 第一次子音推移以前にケルト語よりゲルマン語に借用されたに違いない。では次に Pokorny は *g/k* の交替の問題をどのように解決したのであろうか。彼は *g* と *c* の例を3種類に分けて論じている。まず第一に *c* (= *k*) の方が古い音の場合。ゴール語 *Andecāvi* は後に *Andegāvi* としてあらわれる。これは明らかに後期ゴール語と原フランス語の軟化の痕跡である。第二に *g* の方が古い音の場合。これは *r* と *l* の後にあらわれる実際上の *g* から *k* への音の変化である。例えば *vergo-* と *verco-* 「仕事」の場合。これは大陸ケルト語にのみ生じる。第三に硬貨や銘にあらわれる *c* と *g* の交替は空間節約のためのみのグラフィック上の理由によるものにはすぎない。*Daco-marus* と *Dago-marus*, *Ratu-macos* と *Ratu-magus* などの場合。後期ゴール語における母音間の *g* は軟化現象によって摩擦音 *g* となって, *c* によっては再現され得ない。従って, Feist が挙げた *Cir-manus* の例はグラフィック上の理由によるものである, と Pokorny⁽²²⁾ は言う。この Pokorny の説が正しいかどうかは筆者の判断を越えるものであるが, いずれにせよ, 大陸ケルト語にあっては軟化現象は比較的少なかったのは事実であろう。

ゲルマン語の **rik-* を子音推移と関係づけずにすませる一つの案として

H. Jacobsohn⁽²³⁾ らは次のように考えた。ケルト語の *rīx* は斜格において *rig-* となる (ラテン語 *rex*, *reg-* の関係と同じ) 主格の *s* の前で成立した *k* は借用の際斜格の *g* よりも強い。この主格だけの *k* が変化せずにそっくりそのままゲルマン語に入ってしまった, 従って, *k* は子音推移とは何ら関係がない, とするものである。しかし, *k* はケルト語やラテン語において独立した音としてあらわれるのではなく, 常に *ks=x* の結合形としてあらわれ, *k* だけが分離独立した音として借用されるという考えには難点があるであろう。

3. J. Trier の説

Trier の説⁽²⁴⁾ は結論的に言えば, 第一次子音推移以前のケルト語からゲルマン語への借用はあり得ないとし, ゲルマン語 **rik-* をケルト語からの借用とは認めず, 原印欧語 **reǵ-* の相続語として第一次子音推移をこらむったゲルマン語としての **rek-* とする。しかしながら *-i-* に関してはケルト語の影響であると考え。即ちゲルマン語 **rek-* の上にケルト語の *-i-* が乗っかったと考える。Trier はそれをどのようにして証明しようとするのであろうか。二つの条件を設定する。第一にラテン語, ケルト語の語群 *rēgere*, *rēgnum*, *rēx*, *rēgius*, *rīx*, *rīges*, *rī*, *rīge*, 即ち原印欧語の **reǵ* 語群の派生語がゲルマン語の中に遺産として存在していなければならない。この条件は容易に満たされる, という。事実 **reǵ* の相続語はゲルマン語において非常に多い。現代ドイツ語を挙げてみても *recht*, *richten*, *rechnen* などすぐに思い浮かべることが出来るであろう。第二に, それらのゲルマン語の相続語あるいはそれらの一部は, ケルト語からの影響が確固たる地歩を占めるほど, ケルト語の同族語の意味に添う意味を示していなければならない。なぜならば, 意味の近よりがなくでは影響はあり得ないから, とする。即ちこれらのゲルマン語の相続語において「国家, 支配」等の意味が少なくとも存在していなければならない, と言っているのであろう。しかし **reǵ* に由来する古高地ドイツ語 *rahha* 「物, 状態, おしゃべり」, 新高ドイツ語 *rechnen* 「計算する」, 古代英語

reced「建物」, recednes「話, 説明」, 新高ドイツ語 *Rechenschaft*「弁明」, *geruhen*「かしこくも〜し給う」, *ruchlos*「邪悪な」などの語は「国家, 支配」等の世界と関係がないように思えるが, それは早計であると, 言う。

Trier は **reġ* に *Zaun*, *Zäuner* の根本的意味をあてがっている。*Zaun* は印欧的及びゲルマン的思考の対象であって, 民会 (*Ding*) に輪状になって参加する男たちは一種の *Zaun* を形成しており, また自ら *Zaun* を意識している。政治的な語 *Reich* と *reced*, *rahha*, *rechnen*, *geruhen* などの語との間に存する意味のへだたりは *Zaun* の見地からながめるならば解消するであろう, としている。そして Trier はいくつかの段階に分けて, **reġ* から派生した上記のような一見して「国家, 支配」と関係がなさそうな語群から **reġ* の根本的意味 *Zaun* を求めようと努めるのである。

第一段階として, **reġ*- 語群の中に「家, 屋敷」の意味を見い出そうとする。ギリシア語 *oîkos*「家」やラテン語 *vicus*「村」はゲルマン語の宗教語彙, つまりゴート語 *weihs*「神聖な」, 古代英語 *wēoh*「偶像」, 古代ノルド語 *vé*「神殿」と同源である。その原初的意味は *Zaun* である。ラテン語 *domus*「家」や *Zimmer* は *Zaun* を反映している。又ゴート語の *gards*「家」は *Zaun* の語群原印欧語 **ġher*- から出ている。従って, **reġ*- に由来する語群の中に「家」をあらわす語があれば, **reġ*- は *Zaun* を意味することになる。そのような語は古代英語 *reced*, 古ザクセン語 *racud*, *rachat*「建物, 家」などである。このような類推によってまず第一に **reġ*-=*Zaun* を導き出そうとした。

第二段階として, **reġ*- に由来するラテン語 *regio*「区域, 地方」を *Zaun* と結びつけようとしている。この *regio* は「家, 屋敷, 垣」の意味から遠いように思われる。しかし *Forst*, *Garten*, *Land*, *Grund*, *χώρα*「国, 地方」, *templum*「聖域」は「垣をめぐらされた」あるいは「回りに境界をつけられた」「地帯」である。*regio* もこの系列に入る。*regio* には「直線, 列」, 特に「境界線, 境界」の意味もある。ここにおいて第二に

*reġ- = Zaun を導き出そうとした。

第三段階として、「列」や「整理」などの意味をあらわす語、例えば、古代英語 *reccan* 「伸ばす」、ゴート語 *ufrakjan* 「伸ばす」、古ザクセン語 *rekon* 「整理する」、*rekkian* 「整理する」、中低ドイツ語 *reken* 「達する、伸ばす」などの語の中に *Zaun* の意味を求めようとする。*Zaun* は整理された列である、といえる。中低ドイツ語 *te reke* は列になって立っている人間のことを言っているし、スイス方言 *Recken* は人間の列のことである。*Reck* 「鉄棒」は伸ばすための道具ではなくて、*Zaun* の最小単位で、2つの垂直な支柱にささえられた水平の棒である。**reġ-* に由来するラテン語 *rēgula* 「物差し」は水平ということが決定的な意味を占めている。ここに **reġ-* における水平な *Zaun* の意味が獲得される。

第四段階として、輪状な *Zaun* を **reġ-* の中に認め、それに倫理性と義務を見い出そうとする。即ち、*Zaun* としての人々の輪の一人一人に定まった義務が課せられる。その輪の中で義務的な「心配、気づかい」などの思想が生ずる。従って、ここに *geruhen*, *ruchlos*, ἀρῆρω 「助ける」などによって **reġ-* における *Zaun* の意味が獲得される。

第五段階として、**reġ-* の中に「数える」の意味を見い出そうとする。中低ドイツ語 *rekenen*, 古高ドイツ語 *rehhanon*, 中高ドイツ語 *rechenen*, 新高ドイツ語 *rechnen*, 古代英語 (ge)*recenian*, 現代英語 *reckon* などにあらわれる。*Zaun* としての「人の輪」は数的な形態である。ギリシア語 ἀρίρω 「数える、算入する」、古高ドイツ語 *rīm* 「数」などの語において人間が一分肢として輪の中に組み入れられることがほのめかされている。フランス語 *ranger* 「整理する、数に入れる」においてそれは明らかである。*on le range parmi le grands poètes* 「人は彼を大詩人に加える」のように使うのである。*ranger* と *le rang* は原印欧語 **hringaz* 「輪」に由来する。またラテン語 *numerus* 「数、部分、秩序」の語幹 **nem-* は *Zaun* の意味をあらわしている。従って、**reġ-* における *Zaun* の意味が獲得される。

第六段階として、**reġ-* の中に「話す」の意味を求めようとする。*Zaun*

としての民会の輪の本質的な行為の一つは「話す」ことである。従って、**reġ-* に由来するラテン語 *rogare* 「問う」、古代英語 *racu* 「説明、報告」、古ザクセン語 *raka*、古高ドイツ語 *rahha* 「話」、*rahon* 「話す」などの語があらわれ出でる。

最後の段階として政治的な領域に入る。*Zaun* から「支配」への道が通じているのである。ギリシア語 *ἄρχειν* 「支配する」は *ῥοχέισθαι* 「踊る」や *ἔοχσθαι* 「来る」とならんで *ἔοχος* 「垣」から出ている。従って、*ἄρχος*, *ἄρχων* 「支配者」は、輪を把握し、整え、支配する *Zäuner* なのである。また古い印欧語 *pótis* は「支配者」をあらわす。この *potis* とゴート語 *faba* 「垣」との間には関係がある。従って **reġ* における「支配」を意味する *Zaun* が明らかとなる。

このように *Trier* はゲルマン語のみならず、ギリシア、ラテン語をも縦横に駆使して、意味の関連する語からの類推によって **reġ* における原初的な意味、*Zaun* を得たのである。

さらに *Trier* は **rik* の *-i-* の問題に関してこう発言している⁽²⁵⁾。

ゲルマン人は **reġ* 語群の「支配者」を意味する延長階梯を有していたが、相続的には存在してはいない。即ちケルト語 *i* の影響にさらされて、相続の **rēg/rāg* を失ってしまったのである。そして *g > k* としての *k* のみを相続した。なぜケルト語の影響を受けねばならなかったかと言え、それにはケルト人とゲルマン人との間に国家歴史的段階の相違があって、ケルト語の *rī*, *rīg* 等はゲルマン語の一番近い相応語よりも 2, 3 歩進んでいたに違いない。その間をぬってゲルマン語の延長階梯の母音をケルト語的に *i* とさせたのである。

Trier は最後に **rikja* の成立についてこう述べている。⁽²⁶⁾

ゲルマン語の動詞に *raikjan* という語がある。この基礎階梯は *i* を有していたにちがいない。そして原印欧語 **rēig-* 「伸ばす」にさかのぼり得る。この語は *reichen*、古高ドイツ語 *gareichen*、英語 *reach*、中低ドイツ語 *reken*、古代英語 *roecan* などにあらわれる。この語の意味は **reġ* 語群の意味に近い。例えば、人の輪の一人一人が杯などを手から手へと手

渡すという意味がこれにもりこまれている。この意味の接近の故に, *raikjan* はケルト語化した *i* を有した語をゲルマン語化させることに寄与した。そして **reġ* の *i* と **reiġ* の *ai* がゲルマン語内で融合した。⁽²⁷⁾ こうして成立したのが古高ドイツ語 *rīhhan*, *rīchan* 「支配する」である。ゲルマン語の語感からしてみれば, 古高ドイツ語の *rīhhi* などの *i* もまた基礎階梯 *i* の性質を得て, ゲルマン語の音韻に同化した。この時点より **rikja* は完全なゲルマン語となる。以上のように *Trier* は推測した。

Trier の考えは画期的である。従来は音韻変化と形態にのみ関心が払われて来たが, *Trier* はイメージを押し広げ, 意味の発展に重きを置いた。しかしながら彼は **reġ* の原義の設定にあたり, あまりにも類推にかたよりすぎていることは否めない。A. Walde, J. Pokorny, J. Gonda, C. Watkins などの印欧学者は **reġ* に「ある一定の方向に伸長させる (する)」の意味をあてがい, **rēġ* は **reġ* の延長階梯と見なした。従って, ラテン語の *regere* 「支配する」は「まっすぐに伸ばす」→「導く」→「支配する」と意味を発展させたにちがいない。*rīhhi* もこれにつらなる支配に関する語である。*Trier* は「建物」「話す, 心配する」「数える」の意味を *Zaun* から解釈しようと試みたが, これらは「まっすぐに伸ばす」の意味からの転用と解釈しても一向にさしつかえないように思われる。「建物」に関して言えば, 少なくとも, 古代ゲルマン人の家は木と粘土から出来ていた。家を支えるためには何本かの丸太が必要である。それは上に向かって, 即ち「一定の方向に伸ばされ」ねばならないのである。「話す, 心配する」の意味も, 支配者などが人々を思い「心配したり, 話しかけたり, 援助したりして」腕を人々に「さし伸ばす」のである。「数える」の意味も「まっすぐに伸ばす」→「整理する」からおのずと「整理する」ために「数える」作業が必要となって来るのである。**reġ* は明らかに「まっすぐに伸ばす」の意味にほかならない。

Trier はただひたすら *Reich* を原印欧語からの相統語としてゲルマン語固有の語彙の一つに組み入れようと努めたように思われる。それにはこの論文が執筆された年 (1943年) が考慮されねばならない。即ちドイツの

命運をかけた戦争の直中にあって、Trier にあっては Reich 「帝国」の意味の内にヒットラーの第三帝国 (das Dritte Reich) が暗示されていたのかもしれない。このような Reich という重要な国家に関する語は純ゲルマン的でなければならなかったのではないだろうか。いみじくも Trier の次のような言葉の中に一種の意気込みが感じられるのではなかろうか。⁽²⁸⁾

„Es ergäbe sich eine Möglichkeit, das Wort *Reich*, an welchem in geschichtlicher Zeit so viel deutsches Schicksal hängt, in welchem sich auch heute alles verdichtet, was wir von der Zukunft erhoffen, weit stärker, als es eine reine Entlehnungsthese zuläßt, in den Strom der ungebrochen heimischen Sprachentwicklung hineinzustellen.“

4. P. v. Polenz の説

v. Polenz⁽²⁹⁾ も *rik- のケルト語借用説を否定し、純粋なゲルマン語とするものである。Reich は古高ドイツ語時代から「力、支配」のみならず、「地域、周辺、領域、方法 (Landschaft, Gegend, Bereich, Himmelsrichtung)」などの意味をあらわした。ゲルマン語 *rikja はゲルマン語 *raikjan とアプラウトの関係にあり、*rikja の原初的な意味は「領域 (Bereich)」である。従って、*rikja は印欧語からの直接の相続語である、とするものである。以下、v. Polenz の見解を見て行こう。

古高ドイツ語 rihhi は「地方、地域、周辺」などの意味で、オトフリートにしばしばあらわれる。sehet, mit then ougon, beginnit umbiscouon: nist ákar hiar in ríche (Ⅱ, 14, 105~106) 「さあ、己が目で見回しなさい。このあたりには色あせていない畑はありません。」quadun sumiliche fon thémō selben ríche (Ⅲ, 16, 49) 「同じ土地の幾分かが言った」などのように、古高ドイツ語の rihhi は、話者あるいは当該の人物が存在するある限定された非政治的な空間を指している、また古ノルド語の riki も純粋に地理的な意味で「地方」をあらわしている (J. Fritzner: Ordbog over Det gamle norske Sprog Ⅲ, 111)。⁽³⁰⁾ この rihhi

が政治的な空間を意味していないことは, *rihhi* が方位をあらわしていることから明らかである。例えば, *occidens* 「西」は *westerriche*, *oriens* 「東」は *osterriche* とあらわされる。またイシドールの *nescio quem regem ex genere Iudae in extremis orientis partibus regnum tenere* 「ユダヤの民のいかなる王が東のはての地で王国を築いているかを私は知らない」は *ni uueiz ih einigan chuninc fona Iudases edhile noh in ûzsonôndêm endum oostarriihhes uualdendan* と訳されている。この *riihhi* は *regnum* ではなくて, *partibus* の訳である。このように *rihhi* は純粹に地理的な意味で用いられている。要するに, *Reich* は *Bereich* 「領域」なのである。その領域の上を当該の事物が広がり, 及ぶ (*reichen*) のである。*Tierreich*, *Pflanzenreich*, *Mineralreich* 等の用法はまさしくこれである。*Erdreich* や *Himmelreich* は単に場所を示していて, *Himmelreich* における「天上における神の支配領域」の意味はキリスト教的世界の下で成立したにすぎず, 元々は単に空間表示にすぎなかった。この「領域」を意味する *Bereich* は動詞 *be-reichen* からの抽象名詞である。これは *reichen* (ゲルマン語 **raikjan*) から作られている。この *Bereich* なる語自体は新しい, しかし *Bereich* なる概念は古い。というのはそれ以前は *Reich* なる語でもってあらわされていたからである。ここに *Reich* と *Bereich* の歴史的な繋がりが生じる。即ち **rikja* と **raikjan* との関連が見いだされるのである。*raik-* は *rik-* のアプラウト階梯である。これは 原印欧語語幹 **reiǵ-* にさかのぼり得る。従って, *rikja* は **reiǵ* からの純粹にゲルマン語の相続語なのである。**reiǵ-* はそもそも「伸ばす」を意味しており, **rikja* における「支配, 力」の意味はゲルマン語内において発達した。*v. Polenz* は以上のように推測した。

v. Polenz は, **rikja* を原印欧語 **reiǵ* に引き戻し, *Reich* の持つ非政治的な意味に注目し, 意味史論的に論じたことは十二分に評価されてよいであろう。**reǵ* と **reiǵ* の関係はつとに *Brugmann* が唱えたところであったが, そこには意味的な裏打ちがなかった。また *Trier* の考えの

及ぶところでもあった。そこに v. Polenz は Trier の影響を受けているであろう。ところで v. Polenz は Reich における Bereich の意味を9世紀から特に古高地ドイツ語を中心にして例証したが、そこには限定された場所と資料の不足は否めない。広くゲルマン語全体にわたって目を通すべきではなかったろうか。原初において Reich (rihhi) は Landschaft, Gegend, Umgebung などの意味であったとするが、古高ドイツ語において最初からそのような意味が存在するならば、あまねく広まっていなければならないのではなかろうか。古高ドイツ語時代に最も数多くの語彙を広汎に用いたのはノートカーであるが、彼にあっては rihhi は regnum なのであって、regio ではない。この regio の意味はノートカーでは gebiurda (Gegend), halba (Richtung, Gegend), land (Land, Gegend, Gebiet), landschaft (Landschaft, Cand, Gegend) であらわされている。やはり Reich における Landshaft, Gegend 等の意味は Macht, Herrschaft → Herrschaftgebiet → Gebiet, Landschaft と意味を変針させていったのではなかろうか。

5. むすび

前にも挙げたが古高ドイツ語に ambaht「奉仕, 官職」という語がある。現代ドイツ語の Amt はこれに由来する。この ambaht は am と baht に分析され得る。am はゲルマン語的ではない。これは原印欧語の m₀ にさかのぼり得るので、ゲルマン語ならば um になっていなければならないはずである。翻って、am はケルト語にあらわれる。従って ambaht はケルト語 ambactos からの借用語と考えられ得る。-c- は -h- となって第一次子音推移を受けているが、-b- はそのままで子音推移を受けていない。従ってこの語が借用された時期は、b→p の推移が終った後、k→x の終結以前ということになる。恐らく第一次子音推移の順番は bh, dh, gh→ b, d, g, b, d, g, → p, t, k, p, t, k → f, p, x(h) となるであろう。ゲルマン語 *rik- も恐らくケルト語 *rig- からの借用語であろう。その時期は ambaht の借用時期よりも早いことになる。*rik- の早

期の借用は不可能であるという説は否定されなければならない。カエサル
の「ガリア戦記」6, 24, 1 に「かつて勇気において、ガリア族がゲルマン
族を圧倒していたときがあった」とあるように、ゲルマン族よりもケルト
族の方が、政治的、軍事的に優っていた時期があった。それはラテーヌ
(La-Téne) 期であったろう。紀元前4世紀頃がケルト人の最も活躍した
時代とされている。この頃からローマ人のガリア占領までゲルマン人とケ
ルト人は緊密な関係にあった。その間のある時期にゲルマン人たちがすで
に失ってしまった *rek- を *rik- としてケルト法から借用したと推測
したい。

注

- (1) Antoine Meillet: General Characteristics of the Germanic Language, Englisch Translation, 1970 p. 113
- (2) Wilhelm Streitberg: Urgeschichte Grammatik 1974⁴, S. 137
- (3) Hans Krahe: Germanische Sprachwissenschaft, 1969⁷, S. 24
- (4) Karl Brugmann: Vergleichende Laut-, Stamm- Bildungs- und Flexionslehre der Indogermanischen Sprache, 1897. Bd. 1. S. 504f.
- (5) Jost Trier: Vorgeschichte des Wortes Reich, Nachr. d. Ak. d. Wiss. zu Göttingen, phil-hist. kl. 1943. S. 535ff
- (6) Peter von Polenz: Das Wort 'Reich' als unpolitische Raumbezeichnung, Zeitschrift für deutsche Philologie 76. 1957. S. 80ff.
- (7) H. D'Arbois de Jubainville: De quelques termes du droit public et du droit prive. Mémoires de la société de linguistique de paris. 1892, 287-289
- (8) Adolf Noreen: Abriss der urgermanischen Lautlehre, 1894, S. 15f.
- (9) K. Brugmann, op. cit., S. 135
- (10) ibid., S. 504f.
- (11) Sigmund Feist: Die Ausbreitung des indogermanischen Sprachstammes über Nordeuropa in vorgeschichtlicher Zeit. Wörter und Sachen Bd. 11, 1928
- (12) ibid., S. 33ff.
- (13) ibid., S. 47f.
- (14) Julius Pokorny: keltische Lehnwörter und die germanische Lautverschiebung, Wörter und Sachen Bd. 12, 1929.
- (15) Holger Pedersen: Vergleichende Grammatik der keltischen Sprachen.,

Bd. 1. 1976 (1913)

- (16) J. Pokorny, *op. cit.*, S. 303
- (17) H. Pedersen, *op. cit.*, S. 533
- (18) *ibid.*, S. 427
- (19) *ibid.*, S. 437
- (20) J. Pokorny, *op. cit.* S. 303f.
- (21) S. Feist, *op. cit.*, S. 48. Anm. 1
- (22) J. Pokorny, *op. cit.*, S. 305
- (23) Hermann Jacobsohn: *Altgermanisches*, *Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur* 66, 1929. S. 227
- (24) J. Trier, *op. cit.*, 535-582
- (25) *ibid.* S. 565f.
- (26) *ibid.* S. 567f.
- (27) この *reg と *reig の混淆を支持する考えが、最近にもあらわれている。例えばテキサス大学の Edgar C. Polomé である。Edgar C. Polomé: *Germanic and the other Indo-European Languages, Toward a Grammar of Proto-Germanic*, edited by F. van Coetsem, H. L. Kufner, 1972. p. 67.
- (28) J. Trier. *op. cit.*, S. 537
- (29) Peter von Polenz: *op. cit.* 80-94
- (30) しかし同書では riki の意味を5つの項目に分け、その最後に Landskab (=Landschaft) の意味をあてがっているにすぎず、他の4つの意味はおしなべて「力, 支配」をあらわしている。従って、転用も十分考えられ得る。